

十 全 會 雜 誌

第三十八卷 第六號 (第三百三十二號)

昭和八年六月一日發行

原 蒼

金澤醫科大學第一内科教室

(前主任山田教授)
(現主任谷野教授)

急性陰門潰瘍ノ稀有ナル一例ニ就テ

柿 下 正 道
島 尾 二
英 久

(昭和8年1月13日受附)

本症ハ1912年 Lipschütz ニ依リ始メテ詳細ニ報告セラレタルモノニシテ、通常急性ニ現ハレ主トシテ小女又ハ稀ニ若キ妻ノ外陰部粘膜或ハソノ周圍ニ發生スル一種ノ潰瘍ニシテ、ソノ臨床上ノ外觀ハ性病性又ハ壞疽性潰瘍ト極メテ類似シ、放尿、歩行等ニ際シ激シキ疼痛ヲ伴ヒ、且ツ比較的急激ナル組織ノ崩壊ヲ來セドモ必ず良性ノ經過ヲ辿ルヲ以テ特徴トセリ。而シテコレヲ組織學的ニ檢スルニ血管殊ニ靜脈及ソノ周圍ニ變化ヲ認ムルヲ特徴トシ且ツコレヲ細菌學的ニ檢スルニ常ニ Lipschütz ノ Bacillus Crassus ト名命セルグラム氏法陽性ナル太キ桿菌ヲ認ムルヲ常トス。

本症ニ關スル從來ノ報告ヲ涉獵スルニ、泰西ニ於テハ可成多數ノ報告存スト雖モ本邦ニ在リテハソノ報告僅カニ數例ニ過ギズ。(高橋及能勢、嵯峨、公莊、櫻根、谷村等)

殊ニ陰部以外ニ同様ナル潰瘍ヲ認メタルモノハ極メテ少數ニシテ吾ガ國ニ於テハ余等ノ寡聞未ダソノ報告ヲ見ズ。余等ハ偶々内科の主訴ヲ以テ吾ガ外來ヲ訪レタル一小女ニ於テ本症ノ極メテ稀有ナル合併症ヲ伴ヘル一症例ヲ經驗シ、約2ケ年間ニ亙リ、ソノ診療ニ從事スルヲ得タルヲ以テ、此處ニソノ大略ヲ報告シ、以テ後學ニ資セント欲ス。

症 例

患者 坂○よ○, 17年, 初診 昭和5年12月8日.

(1) 血族の關係 父母兩系ニ於テ共ニ特記ス可キ遺傳的の疾病ナク、同胞ハ2男2女ノ4人中患者ハソノ末女ナリ。長男ハ結核病ニテ死亡セル他ハ皆健康ニシテ、殊ニ患者ト同様ナル疾病ニ罹リシ者ナシト云フ。

(2) 既往症 母乳榮養ニシテ、正常ナル發育ヲ遂ゲ7歳ノトキ麻疹及腹膜炎ヲ經過シ、16歳ノ夏輕度ノ

脚氣=罹レリ，月花未ダ來潮セズ。

(3)現病歴並=現症 便宜上先=來院當時ノ主訴病歴並=現症ヲ敘シ次ギテ，潰瘍病歴並=現症トニ分チテ記述セント欲ス。

主訴病歴 昭和5年8月頃ヨリ，次第ニ全身倦怠ヲ覺ヘ，之ニ伴ヒ心季亢進ヲ訴フ，殊ニ日ヲ追フニ從ツテ膝部ノ「ガラガラ」スルガ如キ感ヲ覺エ，歩行多少不確實トナレリ。最近10日程前ヨリ兩足下部ニ「シビレ」感ヲ來シ，履物ノ脱グルヲ自覺セザル事サエアルニ至レリ，依テ當科ヲ訪ネ診療ヲ求メタルモノニシテ自然來院當時ノ主訴ハ兩腳下部ノ障礙トス。

現症 體格榮養中等ニシテ貧血ヲ認メズ，皮膚纖弱脂肪組織ノ發育ハヤ、惡シク，體溫37度5分，脈搏100，呼吸數24ヲ算セリ，心臓濁音界ハ尋常ニシテ，肺動脈第2音稍々亢進セル外循環器系ニ異常ヲ認メズ。

肝肺境界正常，兩側鎖骨上高ハ呼吸僅カニ延長シテ銳利，打診上鼓音ヲ呈シ短ナリ。

膝蓋腱反射，「アヒレス」腱反射共ニ弱ク，觸覺，溫覺，痛覺ハ4肢ノ遠心部ニ於テ鈍麻シ，殊ニ趾脊ニ於テ著明ニ減弱セリ。

歩行ハ少シク不確實ナレドモロンベルグ氏現象ハ陰性ナリ，腹部ニ於テハ特記ス可キ病的所見ヲ認メズ。

上記ノ如キ病歴並=所見ニ依リ脚氣ナル診斷ノ下ニ入院セシメ，其ノ後ニ至リ更ニ詳細ナル問診ヲ行ヒ口腔並=陰部ニ一種特有ナル潰瘍ノ存在ヲ知り得タリ。

潰瘍病歴 13歳ノ8月頃冷タキ物或ハ熱キ物ヲ食スルニ右頰粘膜部ニ滲透痛アリテ，流唾著シク，第1及第2大臼齒ノ咬合線ニ一致セル高サノ部ニ小豆大ノ白斑ヲ認メ觸ルニ疼痛アリ，當時醫師ヨリ投藥サレタル含嗽劑ニ依リ治癒セリ，以來同様ナルモノ口腔内ニ數10回發生セシモ概ネソノ發生部位ハ兩側頰粘膜ノ部位，或ハ舌ノ兩側縁及ヒ尖端部又ハ下唇齦頰移行部ニシテ，ソノ大サハ每常大豆大以下ナリキ。疼痛ハ其ノ發生初期ニ著シキモ旬日ニシテ去リ間モナク治癒セルヲ常トセリト云フ。

偶々昨年(昭和4年)1月頃軽度ノ發熱感アリ，全身倦怠，頭痛等アリ感冒ニ罹リシモノト思惟セシニ間モナク肛門ノ後邊部ニ小指痕大ノ「タァレ」(潰瘍)ヲ生ジ，疼痛強キ爲民間藥ヲ以テ治療セシニ約20日ニシテ治癒セリ。

然ルニ同年3月頃ニ至リ右大陰唇ニ前同様ナル大豆大ノ潰瘍發生セシモ其ノ際ニハ發熱感ノ記憶明ナラザリキ，依テ前同様民間藥(粉末)ヲ用ヒシモ快方ニ向ハズ，排尿及歩行ニ際シ刺激ス如キ疼痛アリテ漸次増大シ，膿ヲ漏スニ至リ醫師ヲ訪フニ硬性下疳ノ診斷ヲ受ケ，「サルバルサン」注射，水銀塗擦，並ニ洗滌等ノ療法ヲ受ケ約3ヶ月餘ニシテ治癒セリ。今年春(昭和5年)ニ至リ再び同様ナル潰瘍陰部ニ發生セシガ，40日位ニシテ醫療ニ依リ治癒セリ，其ノ頃口腔ニモ亦繰返シ潰瘍ノ發生ヲ認メタリト云フ。11月ニ至リ右大陰唇ニ2個ノ潰瘍發生シ，前醫ヲ訪ネシモ治癒セズ，排尿時疼痛激シク，膿ノ爲陰部汚染シ，潰瘍漸次増大シ，歩行ニ際シ強キ疼痛ヲ覺エ，症狀輕快ニ向フノ狀無シ。而シテ患者ノ訴ニ依レバ，口腔並=陰部ノ潰瘍共ニ冬期ニソノ發生多ク，夏期ハ比較的少シト云フ。

口腔所見 先天性畸形，口氣惡臭等ナク，味覺異常ナシ，齒牙ノ發生，並列正常ニシテ齒齶及ビ咬合共ニ尋常ナリ，著明ナル齒石ノ沈着ヲ認メズ，又咀嚼ニ際シ口腔粘膜ヲ刺戟又ハ損傷スル如キ齒質ノ缺損ナシ。唾液分泌ヤ、亢進スレドモ廣範ナル口腔粘膜ノ炎衝性症狀ナク，齒齦出血等ノ認ムベキモノナシ。

下唇正中線ヨリヤ、左側ニ偏シ，亞布答性口内炎ニ見ル如キ灰白大豆大ノ表面平滑ニシテ，知覺銳敏ナル偽膜様物ヲ認メ之ヲ剝離スル事能ハズシテ出血シ易シ，ソノ周圍ノ粘膜ニ潮紅輪ヲ認ムルモ其ノ部ノ浸潤ハ極メテ僅少ナリ。

舌尖部舌繫帶ニ近ク、右側ニ於テ米粒大ノ外觀上下唇ニ於ケルモノト同様ナル亞布答様物ヲ認ム。

右側頰粘膜ニ於テ第1及第2大白齒ノ幅徑ニ涉リテ、咬合線ニ一致セル高サニ、不正橢圓形ノ汚灰白色ノ「ヂフテリー」様ノ偽膜ヲ覆ヒタル、淺キ實質缺損ヲ認メ、底面ハ健康部ヨリ僅カニ凹陷シ、邊緣少シク潜穿ス。該部ヲ觸ルニ刺痛アリ、且偽膜様物ヲ剝離セントスレバ出血ス。其ノ邊圍粘膜部ハ平滑ナレドモ極メテ淺キ凸凹部アリテ、治癒セシ潰瘍ノ癍痕ヲ想像セシム。左側頰粘膜ノ之ニ相當セル部位ニモ亦同様ナル癍痕性凹凸ヲ認ム。

陰部所見 外陰部及ビ膣ニ於テ先天性畸形ヲ認メズ、處女膜ハ半月狀ヲ呈シ、裂傷ナシ。膣口ヨリハ白色ノ粘稠ナル帶下ヲ出ス。

外陰部ニ於テ3個ノ帶黃白色ノ軟弱平滑ナル癍痕ヲ認メ、一ハ陰核ニ近ク右側大陰唇ニ、他ハ肛門ノ後邊ニ近キ部ト、左側大陰唇ノ外側ニアリ、大サハ各々大豆大ナリ。

入院時潰瘍ハ、右側大陰唇ノヤ、内面ニ存シ、其周圍即右側大陰唇ノ殆ド後半部ハ著シク腫脹シ、潰瘍ハ前後2個アリテ何レモ拇指頭大類圓形ニシテ其ノ周邊皮膚ハ少シク高起シ、發赤、浸潤帶ヲ繞ル、底面ハ鬆粗ニシテ膿汁ヲ分泌シ、汚穢灰黃色ノ偽膜様物ヲ以テ覆ハレ、觸ルニ滲透スル如キ疼痛ヲ感ジ、出血シ易シ、邊緣多少潜穿ス。右側大陰唇ノ前半部ハ浮腫狀ニ腫脹シ、暗紫褐色ヲ呈シ、觸診スルニ、ソノ硬度極メテ軟ナリ。後半部ハ多少癍痕性收縮ヲ起シタル如キ所見アリ、確然タル癍痕トシテ認ムル能ハザルモ、他部ニ比シテ表面平滑ナリ。左側小陰唇ノ内側ニアタリテハ不正橢圓形ノ潰瘍アリテ、上述セシ右側頰粘膜ニ於ケル潰瘍ト殆ド同様ノ外觀ヲ呈セリ。

(4) 病的材料検査成績

1. 尿 酸性、透明ニシテ糖及ビ蛋白反應陰性、沈渣鏡檢上特記ス可キ所見ナシ。
2. 糞便 暗褐色ナル消化サレタル有形便ニシテ、潛血反應陰性、且少寄生虫卵ヲ認メズ。
3. 血液 血色素 65%(ザーリー氏法)

赤血球數	380萬個
血色素係數	1
白血球數	10000個
白血球ノ百分比	
中性多核白血球	62%
淋巴球	19%
大單核白血球	16%
「エオジン」嗜好性白血球	3%

梅毒血清反應 ワツセルマン氏反應、マイニツケ氏潤濁反應、村田氏反應共ニ陰性ナリ。

4. 腦脊髄液検査成績

壓ハ側臥位ニ於テ水柱 80m.m.ニシテ呼吸時ノ動搖亦正常ナリ。腦脊髄液 20c.c.ヲ採取スルニ壓ハ 60m.m.ニ下降セリ。

液ノ性状、無色透明ニシテ、蛋白質ノ含量ハニツスル、エスバツハ氏法ニ依リ 0.02%ナリ、而シテノンネ氏反應、パンチー氏反應共ニ陰性ニシテ、細胞數ハ 1c.mm 中 4個ヲ算スルノミナリ。

腦脊髄液ノ梅毒反應モ 3反應共ニ陰性ナリ。

5. 潰瘍分泌物ノ細菌學的検査所見 分泌物ハ常ニ酸性反應ヲ呈セリ。

塗抹染色標本 口腔竝ニ陰部ノ兩潰瘍面ヨリ塗抹染色標本ヲ作りテ檢スルニグラム氏法陽性ナル太キ桿菌ヲ多數ニ認メ、然モ該菌ハ主トシテ個々ニ散在シ、時ニ白血球中ニ喰菌セラレアル状態ヲ認ム。而シテ「スピロヘータ」(暗視野裝置使用)結核菌(抗酸性菌染色法ニ依ル)竝ニジユクレー氏桿菌ハ認メザリキ。

培養試験 試ニ普通寒天竝ニ血液寒天培地ニ分泌物ヲ塗抹培養セシニ、染色標本ニ於テ認メタル桿菌ハ好氣性培養ニ於テハ極メテ小ナル露滴狀ノ無色透明ナル集落ヲ形成スレドモ嫌氣性培養ニ於テハ周圍不整ナル中等大ノ集落ヲ形成セリ、殊ニ余等ハツアイスラー氏葡萄糖加血液寒天培地ヲ使用シ嫌氣性培養ヲ施行セシニソノ發育最モ盛ニシテ、周縁不整ナル無色中等大ノ集落ヲ形成シ溶血反應著明ナラズ、尙何レノ培養ニ於テモ少數ノ葡萄狀球菌ノ混在ヲ認ム。本菌ハ糖加液體培地ニ於テ乳酸ノ産成著明ナリ。即以上ノ結果ヨリ見ルトキハ該菌ハソノ性状 Lipschutz ノ報告セシ Bacillus Crassus ト極メテ類似セリ。即先ニ Scherber モ唱ヘタル如ク該菌ハ一種ノ乳酸菌タル事明ナリ。次デ余等ハソノ病原的意義ヲ確定センガ爲ニ本菌ノ患者血清ニ對スル凝集反應竝ニ補體結合反應ヲ行ヒシガ何レモソノ結果陰性ニ終レリ。次ニ本菌ノ加熱「ワクチン」(2c.c.ノ生理的食鹽水ニ一白金耳ノ菌ヲ浮游セシメ56度ニテ30分間加熱殺菌セルモノ)ヲ製シ、コレヲ患者上膊ノ皮内ニ0.2c.c.注射セシニ約6時間ニシテ局處ノ發赤腫脹竝ニ發熱39度ヲ現ハセリ。然レドモ對照トシテ近似年齢ノ小女5名ニ接種セシモノハ僅カニ局處ノ發赤ヲ見タルノミニシテ、腫脹竝ニ發熱ハ認メザリキ、即本現象ニ依リ一種ノ「アレルギー」様反應陽性ナルモノト認ムルヲ得可シ。次ニ本菌ヲ用ヒテ海獺及家兎ノ陰部ニ接種セシニ、家兎ニ於テハ接種後24時間ニシテ局處ニ棒針頭大ノ腫物ヲ生ゼシモ遂ニ潰瘍ノ形成ハ認ムル能ハザリキ。文獻ヲ涉獵スルニ Rosenthal Schwarzkopf ハ B. Crassus ハ患者血清ニ對シ凝集反應及補體結合反應陰性ナレドモ「アレルギー」反應ノミ陽性ナリシヲ報告シ、又動物實驗ニ關シテハ Schwarzkopf ハ獺ニ於テ、Kumer ハ海獺及人體ニ接種シテ陰性ナリシモ、家兎ノ陰部ニ於テハ接種後24時間目迄該菌ヲ證明シ得タルヲ報告シ、Schugt ハ患者ノ陰部ニ接種シテ陰性ノ結果ニ終レリ。タゞ Scherber ノミハ雌性家兎ノ陰部ニ接種シ、3日目ニ類似ノ潰瘍ヲ認メタリト報告セリ。即余等ノ成績モ亦上述諸家ノソレト大體同様ナル結果ヲ得タルモノニシテ、該菌ヲ全然無視スル能ハザレドモ單ニ以上ノ檢索ノミヲ以テ直チニソノ病原菌ナリト斷定スルノ勇氣ヲ有セズ。

6. 病理組織學的檢査 試ニ口唇竝ニ陰部ノ潰瘍ヨリ試驗的組織片ヲ切除シ組織學的ニ檢セシニ、兩者ノ所見殆ド同一ニシテ、ソノ主ナル變化次ノ如シ。

潰瘍底面ノ淺キ部ニ於テハ細胞核ハ一般ニ消失シ、又ハ「ピクノーゼ」或ハ崩壞ヲ示シ、細胞體ハソノ境界ヲ失シテ無造構ニ「エオジン」ニ濃染シテ壞死性變化ヲ呈ス。底面深部ニアリテハ結締織ハ鬆疎水腫狀ヲ呈シ、細血管壁ハ腫脹シ、内被細胞核ハ染色甚ダ不良トナリ、管腔内白血球ノ出現竝ニソノ血管周圍組織内ニ組織球性細胞及白血球ノ滲出ヲ著明ニ認ム。尙所々ニ淋巴細胞ノ集積アリ。

潰瘍周圍ノ粘膜組織ハソノ排列常態ナレドモ核染色一般ニ稍不良トナリ、粘膜下結締織ハ

一般ニ鬆疎ニシテ水腫狀ヲ呈シ、細血管ハ著明ニ充盈擴張シ、血管壁ハ腫脹シ、管腔内白血球ノ出現竝ニ血管周圍ニ於ケル白血球ノ滲出及組織球性細胞ノ出現共ニ著明ナリ。

次ニ組織片中ニ於ケル細菌ノ檢出ヲ試ミタルモ病狀相當ニ進行セル後ニ組織片ヲ切除セシ爲カ、組織内ニハコレヲ證明スルヲ得ザリキ。

経過及治療

口腔内潰瘍 患者入院以來1ケ年半ノ間ニ於テ口腔内ニ潰瘍ヲ生ズル事約30回ニシテ、舌前部3分ノ1ニ生ズル事最も多ク次ハ兩側頰粘膜ノ大白齒部、齒齦ニ於テハ小白齒ノ近圍ニ生ジ易ク、上唇齦頰移行部及硬口蓋ニ生ジタル事最も少シ。

潰瘍ノ大サハ舌ニ於ケルモノハ小豆大以下ニシテ、頰粘膜ニ生ジタルモノ比較的大ニシテ長徑最も大ナル時期ニ於テ1cmニ達セリ。潰瘍ノ形狀竝ニ症狀ハ每常殆ド同様ナリ。

潰瘍ノ新生ヨリ治癒ニ至ル期間ハ大概初メノ内ハ約1ケ月ヲ要シ、當時ノ治療法ハ10倍稀釋「オキシフル」液ヲ以テ含嗽セシメ、又潰瘍新生ノ極メテ初期ニ於テハ20%硝酸銀液ヲ以テ腐蝕ヲ試ミタルモ著効ヲ認メズ、ノミナラズ硝酸銀使用ニ依リ反ツテ症狀ノ増惡ヲ見タル事アリキ。次ニ細菌ノ生物學的性質ニ鑑ミ2%重曹水ノ含嗽ヲ行ハシムルニ至リ約2週間内外ニシテ治癒スルニ至リシモ潰瘍新生ノ頻度ニハ大差ナカリキ。舌部ニ於ケル潰瘍ハ最も早く治癒セリ、而シテ治癒セシ潰瘍ハ每常殆ド瘢痕ヲ殘サズ。

口腔ニ於ケル症狀觀察中昭和6年8月下旬患者ハ突然咽喉部ニ粘液ノ蓄積スルガ如キ感アリテ軽度ノ哽聲ヲ伴ヒ、且ツ嚥下時喉頭部ニ疼痛ヲ訴ヘ軽度ノ發熱ヲ伴ヘリ、直チニ耳鼻科教室ニ於テ喉頭部ノ診察ヲ求メシニ挿圖ニ示スガ如ク、會厭軟骨下部後方ヨリ左側舌會厭襞ニ亙リ大ナル潰瘍ヲ認メソノ周緣部ハ發赤シ僅カニ腫脹セリ、且ツ潰瘍面ハ白色ノ義膜ヲ以テ被ハレ、ソノ狀口腔ニ發生セシ潰瘍ニ極メテ類似セリ、而シテ左側披裂軟骨附近ハ一般ニ腫脹シテ左聲帶ヲ被ヘリ。依テ余ハ2%重曹水ノ吸入ヲ毎日3回行ハシメテソノ經過ヲ觀察セシニ、約2ケ月半ニシテ完全ニ治癒セリ。喉頭部ニ於ケル潰瘍亦再發シ易ク、本年ニ入り3月及7月ノ2回ニ小ナル潰瘍發生シ然モ同時ニ發熱ヲ伴ヘリ。

斯ノ如ク急性潰瘍ノ喉頭部ニ發生セシ報告ハ從來見ザル處ニシテ極メテ興味アル事實ナリト信ズ。

陰部潰瘍 入院中陰部ニ潰瘍ヲ生ジタル事10回ニシテ、ソノ發生部位ハ多クハ大陰唇内側面ヨリ小陰唇ニ亙レル部ニシテ、肛門ニ近ク新生セル事1回、陰唇周邊ニ生ジタル事10回ニシテ大陰唇下部ハ消失シ瘢痕化セリ。

而シテ比較的大ナル潰瘍ノ發生ニ當リテハ每常不定ナル發熱ヲ伴ヘリ。

陰部ニ於ケル潰瘍ノ新生ヨリ治癒ニ至ル期間ハ、口腔ニ於ケルモノヨリモ更ニ長期ニ亙リ大概3ケ月ヲ要セリ。入院當時ハ2%硼酸水或ハ0.5%乳酸溶液ノ洗滌、「ヨードフォルム」撒布、沃度瓦斯應用、「リパノール」液洗滌及同濕布或ハ「リゾール」坐浴等ヲ使用セシモ著効ヲ認メザリキ。依テ余等ハ次ノ如キ治療法ヲ行フニ至リテ潰瘍面ニ於ケル「デフテリー」様義

膜ノ剝離ヲ速カニシ、且ツ潰瘍ノ増大ヲ防止シ、肉芽面ノ増生ヲ促シ、以テソノ治癒日數ヲ短縮シ、約2週間ニシテ治癒スルニ至レリ。

- (1) 用便後「リゾール」坐浴ニ依リ局處ヲ清淨ナラシム。
- (2) 2%重曹水ノ洗滌
- (3) 「キセロフォルム」撒布
- (4) 人工太陽燈照射(アクメ人工太陽燈毎日照射15分間、距離50cm)

殊ニ人工太陽燈ノ照射ニ依リテハ局處ノ疼痛ヲ輕減セシメタリ。

潰瘍治癒後ニ於テハ極メテ薄キ纖弱ニシテ軟柔ナル瘢痕ヲ殘セリ。而シテ再發ニ際シテハ瘢痕上ニ潰瘍ノ擴大スルヲ屢々認メタリ。

次ニ余等ハ再發防止ノ目的ヲ以テ少量ノ「サルバルサン」注射(毎週0.15瓦宛)4%重曹水20c.c.或ハ鹽化カルシウム等ノ靜脈内注射、「スベルマチン」注射、砒素劑或ハ「ビタミン」劑等ノ内服療法ヲ行ヒシモ特ニ効果アリト認メタルモノ無カリキ。

各部潰瘍ノ再發ニ關シテハ患者ノ訴フルガ如ク夏期ニ少クシテ冬期ニ於テソノ頻度ヲ増加スルハ極メテ興味アル事實タリ。患者ハ本年5月ヨリ順調ナル月經ノ來潮ヲ見ルニ至レリ、ソレ以來今日ニ至ルマデ陰部ニ於ケル潰瘍ノ發生ヲ見ザレドモ口腔又ハ喉頭ニ於テハソレニ何等ノ關係ナク屢々再發ヲ認ム。

總括 上來述べ來レル本患者ノ臨床症狀、細菌學的竝ニ病理組織學的檢索ノ結果ヨリ見ル

著 者 名	發 表 年	發 病 部 位		
		陰 部	口 腔	皮 膚
Neumann	1895	+	+	+
Christlieb	1895	+	+	+
Schwab	1904	+	+	-
Fordyce	1920	+	+	-
Planner u. Remenovskiy	1922	+	+	+
Lipschutz	1923	+	+	-
Chauffard, Brodin u. Wolf	1923	+	+	+
Schugt	1925	+	+	-
Pils	1925	+	+	+
Grütz	1926	+	+	+
Schnabl	1927	+	+	+
Carol u. Ruys	1928	+	+	+
Kumer	1930	+	+	+
Walter u. Roman	1930	+	+	+
Käte Jaffe	1930	+	+	-
Wien a. Minnie	1932	+	+	-

ニ、本症ハ Lipschutz ノ報告セル急性陰門潰瘍ニシテ、然モ口腔、喉頭部位ニ外陰部ニ同時ニ發生セシ極メテ稀有ナル症例タル事ヲ確メ得タリ。

陰部以外ノ部ニ發生セシ急性潰瘍ニ關スル報告ヲ見ルニ吾ガ國ニ於テハソノ例ナク外國ニ於テモ僅カニ別表ニ示スガ如キ報告ニ接スルノミナリ。表ニ於テ明ナル如ク、陰部ト同時ニ口腔ニ於テモ潰瘍ヲ認メタルモノ16例ニシテ、内10例ニ於テハ皮膚ニ結節性紅斑ヲ認メタリト云ヘリ。余等ノ例ニ於テハ常ニ皮膚ニハ何等ノ變化ヲ認メズ。

Lipschutz ニ依レバ本症ヲソノ症狀ニ依リ粟粒型、性病型及壞疽型ニ區別セリ。余等ノ例ヲ本分類ニ從ヒテ考察スルトキハ、口腔内ニ發生セシモノハ每常粟粒型ニシテ、陰部及喉頭ニ發生セシモノハ壞疽型ヲ取レリ。

次ニ本症發現ノ原因ニ關シテハ Lipschutz ハ氏ノ所謂 B. Crassus ヲ病原菌ト見做セリ。元來婦人ノ陰分泌液中ニハ常ニ多數ノ乳酸菌ヲ證明シ、コレヲ Döderleinscher Scheidenbakterien ト名命シソノ多寡ニ依リ今日陰清淨度ノ目標トナセリ、一方 Scherber ハ B. Crassus ト Döderleinscher Bakterien トハ同一菌ナル事ヲ主唱セリ。

Lipschutz ノ説ニ依レバ雜菌トシテ擴ク生存セル葡萄狀球菌或ハ連鎖狀球菌ノ何等カノ動機ニ依リ病原性ヲ得テ或ハ膿瘍ヲ形成シ、又敗血症ヲ起ス事アルガ如ク、B. Crassus モ亦平常無毒菌トシテ生棲スルモ時ニ何等カノ原因ニ依リ病原性ヲ得テ、斯ノ如キ潰瘍ヲ形成スルモノナラント云ヘリ。

尙一方 Schabel ハ本症ノ小女ニ來ルハ、ソノ外陰部ノ組織纖弱ニシテ抵抗力弱キ爲ナラント云ヘリ。

今余等ノ場合ニツキテ考察スルニ、外陰部ニ乳酸菌ノ常在スルハ既知ノ事實ナレドモ、口腔内ニ證明セラル、乳酸菌ノ頻度ヲ知ランガ爲ニ10人ノ看護婦ニツキテ檢セシニ齶齒ノ有無ニ關係ナク10人中7人ヨリ同様ナル乳酸菌ヲ證明シ得タリ。

即余等ノ認メタル潰瘍モ亦一種ノ乳酸菌ノ常在セル口腔及外陰部ニ發生セシモノニシテ、一方 Lipschutz ノ説ノ如ク、何等カノ原因ニ依リ菌ガ毒力ヲ得テ病原性ヲ現ハシ以テ潰瘍ヲ形成セシモノナランモ又他方患者ノ體質ニ依リ各臟器ノ本菌竝ニソノ產生物タル乳酸ニ對スル抵抗ノ低下減弱ニ依リ兩者相待ツテ斯ノ如キ潰瘍ヲ發生セシモノナラント思考スルヲ最も妥當ナランカト思惟ス。

稿ヲ終ルニ臨ミ終始御懇篤ナル御指導ヲ賜リタル恩師山田先生ニ敬意ヲ表スル共ニ種々御教示ヲ辱フセル伊藤、松田兩教授ニ感謝ス。

文 獻

- 1) Carol u. Ruys : Acta dermat-Venereol. Vol. 9, P. 123. (1928).
- 2) Christlieb : zit nach Wien a. Minnie.
- 3) Chauffard Brodin u. Wolf : Bull. et mem. soc. méd. d. hop. de Paris V. 39, P. 841. (1923).
- 4) Fordyce : Arch. Dermat. u. Syph. Bd. 2, S. 255. (1920).
- 5) Grütz : Zent. f. Haut u. Gesch. krht. Bd. 20, S. 415. (1926).
- 6) Käte Jaffe : Dermat. Woch.

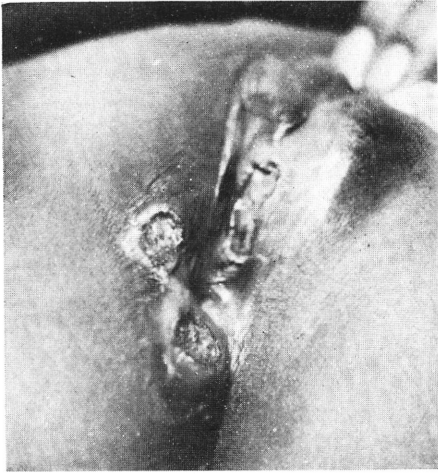
Bd. 90, S. 691. (1930). 7) **Kumer** : Zent. f. Haut u. Gesch. Krht. Bd. 31, S. 417. (1930).
 Dermat. Zeitschrift Bd. 57, S. 401. (1930). 8) **Lipschütz** : Handbuch d. Haut u. Geschlechtskrht. Bd. 21, S. 392. 9) **Neumann** : Wien. k. Rundschau. Bd. 9, S. 289. (1895). 10) **Pils** : Arch. f. Dermat. u. Syphilis. Bd. 149, S. 4. (1925). 11) **Planner u. Remenovskiy** : Arch. f. Dermat. u. Syph. Bd. 140, S. 162. (1922). 12) **Scherber** : Arch. f. Dermat. u. Syphilis. Bd. 127, S. 359. (1919). W. k. W. S. 179. (1918). 13) **Schwarz Kopf** : Zent. f. Haut u. Geschlechts Krht. Bd. 36, S. 153. (1931). 14) **Schügt** : Zent. f. Gynekol. Bd. 39, S. 180. (1925). 15) **Schwab** : Arch. f. Dermat. u. Syph. Bd. 68, S. 101. (1904). 16) **Schnabl** : Dermat. Woch. Bd. 85, S. 1281. (1927). 17) **Walter u. Roman** : Dermat. Woch. Bd. 90, S. 705. (1930). 18) **Wien a. Minnie** : J. of Am. med. Asso. Vol. 98, P. 461. (1932). 19) **高橋及能勢**, 皮膚科及泌尿器科雜誌, 26卷, 694頁, (1926). 20) **公莊**, 皮膚科及泌尿器科雜誌, 29卷, 715頁, (1929). 21) **櫻根**, 皮膚科及泌尿器科雜誌, 29卷, 716頁, (1929). 22) **鶴井**, 皮膚科紀要, 14卷, 238頁, (1929). 23) **谷村**, 東京醫事新誌, 2554號, (1928), 診断ト治療, 18卷, 1553頁, (1931).

附 圖 說 明

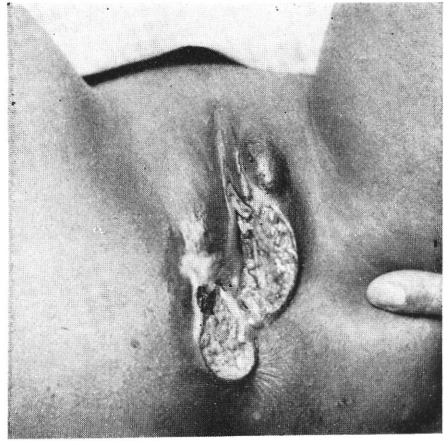
- 第1圖 昭和5年12月22日, 入院時ニ於ケル外陰部ノ状態.
 第2圖 昭和6年1月10日, 潰瘍ノ増悪セル状態.
 第3圖 昭和6年3月10日, 兩側潰瘍縮少シ快方ニ向ヘル状態.
 第4圖 昭和6年4月6日, 右側潰瘍殆ト治癒シ左側ノモノ著シク縮少セル状態.
 第5圖 昭和6年4月10日, 左側潰瘍ノ再ビ増悪セル状態.
 第6圖 昭和6年5月10日, 左側潰瘍ノ漸次増大セル状態.
 第7圖 昭和6年9月2日, 陰部潰瘍ノ全治セル状態.
 第8圖 昭和6年9月5日, 潰瘍癍痕部ヲ墨ヲ以テ明示セルモノ.
 第9圖 昭和6年10月2日, 外陰部兩側ニ小潰瘍ノ再發セル状態.
 第10圖 昭和7年5月1日, 潰瘍全治セル状態.
 第11圖 昭和5年12月26日, 陰部潰瘍ノ組織標本(120倍).
 第12圖 右ニ同ジ(290倍).
 第13圖 昭和6年2月6日, 陰部ニ發生セル潰瘍.
 第14圖 昭和6年3月7日, 舌ニ發生セル潰瘍.
 第15圖 昭和6年4月7日, 口唇ニ發生セル潰瘍.
 第16圖 昭和6年9月15日, 咽頭ニ發生セル潰瘍.
 第17圖 昭和6年9月15日, 喉頭ニ發生セル潰瘍.

柿下・島尾・英論文附圖 (1)

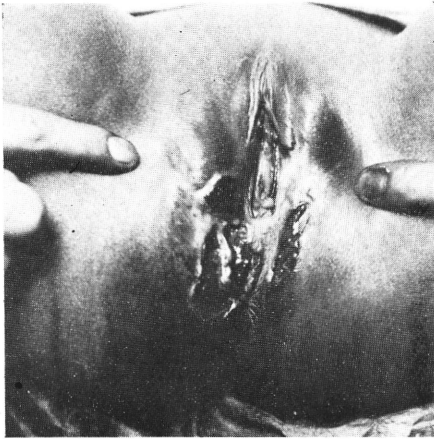
第 1 圖



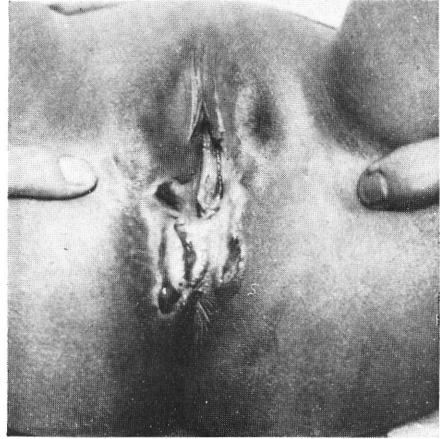
第 2 圖



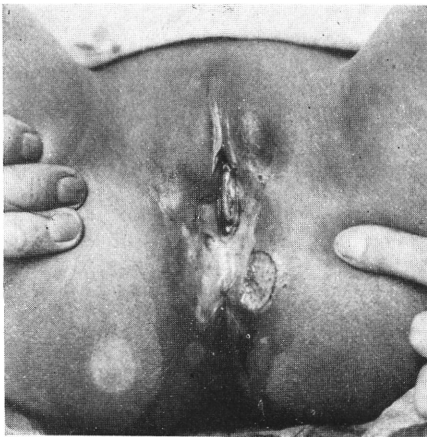
第 3 圖



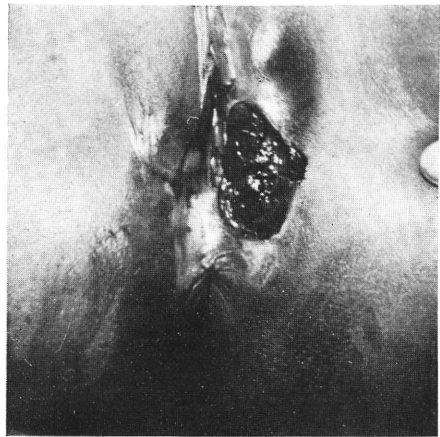
第 4 圖



第 5 圖

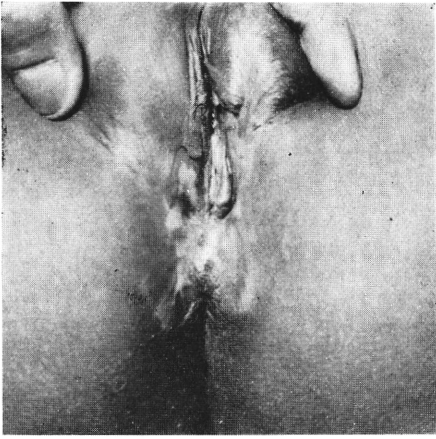


第 6 圖

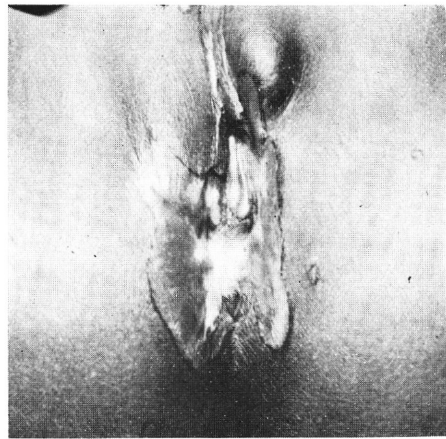


柿下・島尾・英論文附圖 (2)

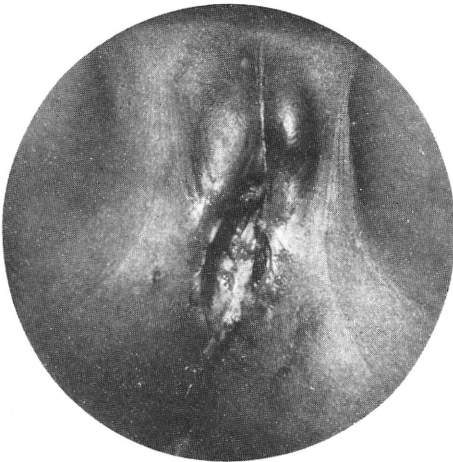
第 7 圖



第 8 圖



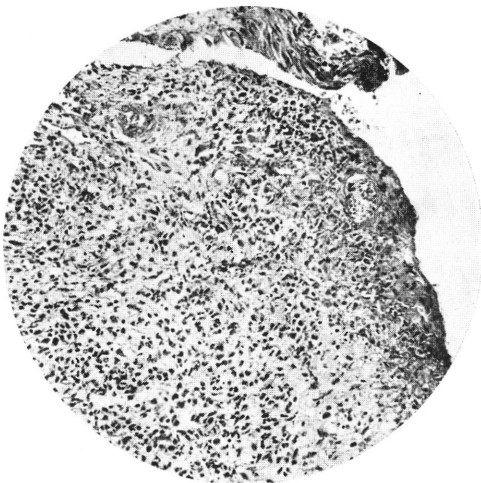
第 9 圖



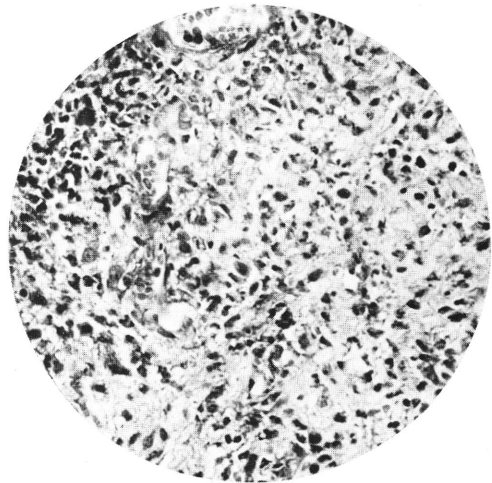
第 10 圖



第 11 圖



第 12 圖



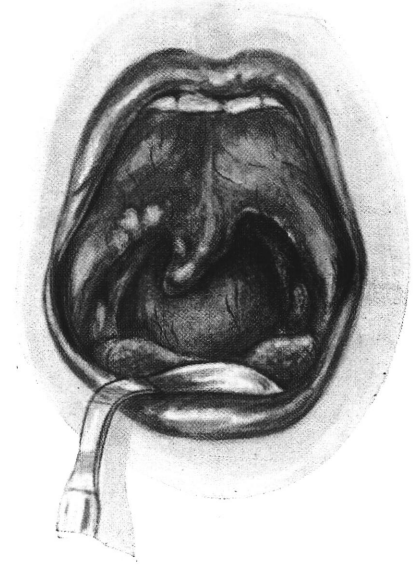
第 1 3 圖



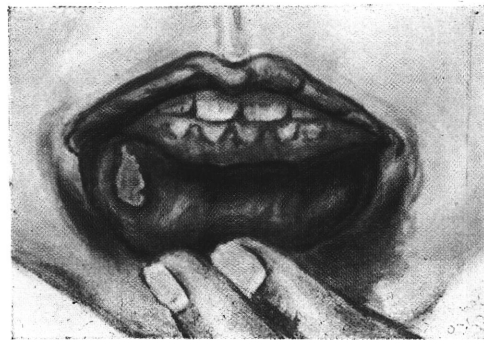
第 1 4 圖



第 1 6 圖



第 1 5 圖



第 1 7 圖

